

当院における肛門疾患 の近況報告



戸田 孝祐

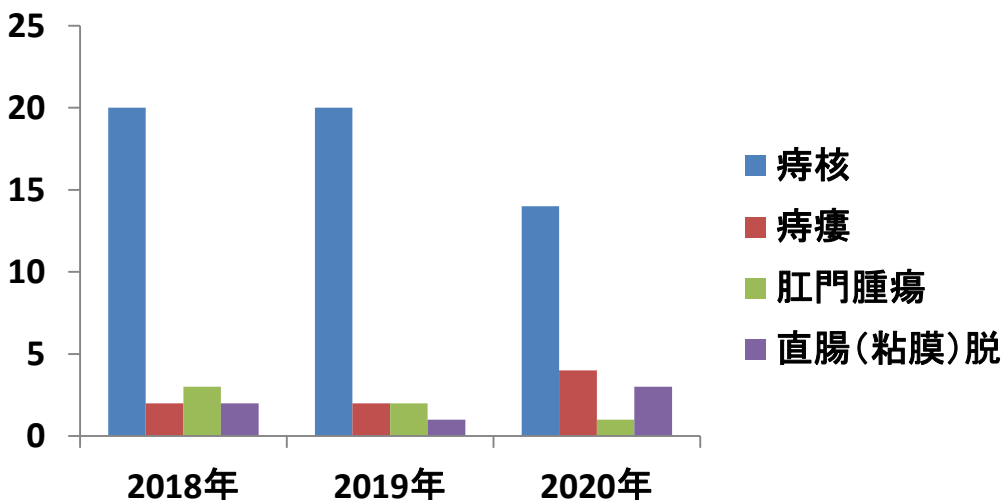
日頃より大変お世話になっております。時の流れは早いもので、私が当院に赴任してもうすぐ2年が経ちます。その間、多数の患者さんの治療に関わらせていただきました。

私は肛門疾患の治療を専門的に行っているため、先日の大津消化器カンファレンスで当院の肛門疾患に対する治療の近況を報告させていただきましたので、その内容を報告させていただきます。

肛門疾患は日常的に遭遇する疾患です。当院では痔核、痔ろう、直腸脱に対して積極的に治療を行っています。肛門は排便機能に関わる重要な臓器であり、必要以上に損傷しない様に配慮を行って治療に当たっています。

2018年から2020年の肛門疾患に関する手術症例を集積し検討を行いました(図1)。下記のグラフのように2018年、2019年の痔核手術は20例、コロナ肺炎の影響もあり2020年は14例と減少しましたが、痔瘻や直腸脱の手術症例はやや増加傾向にありました。

図1. 手術件数



痔核治療法の一つであるALTA療法は3年間で47例施行されており、そのうち6例(13%)に再燃を認めました。再燃時期の中央値は572日(Range 386-839日)であり、再燃後の治療としては1例が再ジオン注療法、2例が手術切除、3例が薬物療法を選択されていました。他施設での報告でも再発率は約10数%程度と報告されており治療効果としては妥当な結果であったと考えます。痔ろうに関しては、部位によりCoring out、シートンドレナージ、Hanley変法を行っています。直腸脱においては4cm未満と4cm以上で術式を変更しています。4cm未満に対してはデロルメ法、4cm以上に対しては腹腔鏡下直腸固定術を行っています。

今後も患者さん一人一人を笑顔にすべく日々研鑽を積んでいきたいと考えています。

